五等分の奇跡（裏）

吉月和玖

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こちらでは、自分で掲載している『五等分の奇跡』の１８禁部分を掲載していこうと考えております。

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２９５４６８／

なので、次の掲載まで大分空くと思われます。

ご了承をお願いいたします。

基本、オリジナルキャラとのお話なので風太郎は出さない予定です。

もしかしたら出すかも…

目　次

中野　一花

一花との初めての情事 ―― 1

一花のご奉仕 ―― 24

バレンタイン ―― 36

中野　一花

一花との初めての情事

一花を後ろから抱き寄せる。
そして、着ているワイシャツをたぐり寄せ、捲りあげる。
太股に手を這わせると、しっとりと汗ばんでいた。
「ひあ、あ……」
直接耳に聞こえてくる嬌声。
手のひらに伝わる、生々しい肌。
「カズヨシ君が、太股、さわってる……　あ、あっ」
一花の甘い匂いを思いっ切り嗅ぎながら、少し汗ばんだ太股を触る。
「息が、かかる……　ん、あ……　カズヨシ君」
ショーツが見えるほど捲ると、羞恥でもじもじする一花。
それだけなのに、もの凄く可愛い。
「一花は相変わらず、いい匂いだよね」
二乃に次いで姉妹でオシャレな一花。ほのかに香水の香りが漂ってくる。
「うぅぅ……　カズヨシ君、言い方が変態っぽいよぉ……」
緊張しているからなのか、一花の体温が上がっていて、体の香りが、増している気がする。
「カズヨシ君と一緒にベッドで眠れると思って、準備してきたのに……　うぅぅ」
「一花のその気持ち、嬉しいよ」
背後から頬にキスをする。
「くぅぅん……　やっ、ぞくぞくするよぉぉ」
「もっと、一花の香りを感じたい。強く抱きしめたくなる」
そう言って、さっきより少し強く抱きしめる。
「カズヨシ君……　んっ、抱きしめられると、胸が苦しくなるよ。でも、もっと、さ、触ってほしくなってくるよ」

「……僕が触れたくなるのと同じように、一花もそう思っててくれて嬉しい」
僕の言葉を聞いて、一花の顔が羞恥に染まった。
「うん……カズヨシ君が思うままに、私に触れて……」
実は恥ずかしがり屋の一花が、大胆な事を言うなんて、かなり勇気を振り絞ったに違いない。
「それじゃ……」
手を移動させて、ショーツに中指を這わせた。
「ん、ふああっ……」
薄い布越しに、熱くてぷにぷにした感触が、伝わってくる。
「嫌な感じとか、しない？」
「う、うん。気持ち、いいよ……あ、あ……カズヨシ君に触られると、体、変になっちゃう……ンン」
「変って、どんな風に？」
指でグリグリ弄りながら、少し意地悪く聞いてみる。
「わ、かんな……い、よ……体が、痺れてきて、胸が、ドキドキして……キスの何倍も、気持ちいいような気がする……はう、あ、あああぁ」
こういう風に素直に答えてしまう一花も可愛いなあ。
ショーツごと肉門を摘み上げる。
「ん、あ……はああ、あっ」
「ごめん、痛かった？」
「大丈夫、痛くないよ……今、体に電気が走ったみたいにビリって、なって……ん、はあ……あ、ん」
てことは、気持ちいいってことだよな。
僕はショーツ越しの局部を、指先でなぞり上げる。
「あふ、あ、あ……あっ……あっ、カズヨシ君、そこ、触られると、ふわって、なっちゃう」
「ここ？」
クリトリスの部分を、円を描くように触ると、一花は腕の中で、ビクビクした。

「あん、あっ……　あ、そこ……　んぁんっ、くすぐったいような、気持ちいいような、変な気持ちがするよ……　あふぁ、あぁ……　あッ」
　肌触りのいいショーツの割れ目を擦るように触る。
「あっ……　あ、カズヨシ君、それダメだよ……　恥ずかしいぐらい、感じちゃうから、ダメ。ふぁぁ、そんなにしちゃダメ……　あんっ、恥ずかしいところだから、弄っちゃ、やぁ……」
　次第に一花の身体に力が入らなくなり、僕に体重を預けてくる。
「ん、ふ……　あ、ああ……　あん、んっ」
　僕は一花が敏感に感じる場所を、なぞり続けた。
「ダメ、だよ、それ……　カズヨシくぅん……　あ、あ、そんな、えっちなことしちゃ、ダメ、あふぁっ」
　一花は首を振るが、抵抗する様子はない。
　僕が施す快感に、小刻みに震えるばかりだ。
「カズヨシ君が、こんなに、えっちなことを、するなんて……　あん、ん」
「まあね。僕も驚いてるよ」
「カズヨシ君がこんなにえっちに指を動かしてくるなんて……　はううっ」
「僕は……　彼氏として、一花を感じさせたくて、触れているから」
　何か本能から来る動きだ。
　触れているうちに、一花のショーツから愛液が染み出して、僕の指を濡らす。
「一花のここ、たくさん濡れてる」
「ううっ、やっぱり……　そうなんだ。あうう、こんなに濡れるなんて、恥ずかしいよ、ふあ、あ……　あんんッ」
「ほら、糸を引くほど凄い」
　透明な糸を指ですくって、一花に見せてみる。
「は、恥ずかしいよ……　カズヨシ君の指、汚しちゃってる、ごめんね」
「謝る事じゃないよ。これは気持ちよくなると出てくるもの、なんで

しょ？」
「う……　うん……」
　むしろこうやって念入りにほぐさないと。
　僕は一花が反応する、コリコリした部分を弄った。
「ひあああっ、あ……　カズヨシ君、そこダメ、あ、あ、あ、あ……　ふあぁんっ」
　太股をくっつけるように、体に力を入れる一花。
「体がふわって飛びそうになる、あ、あんっ、カズヨシ君、怖いよ……　あ……　ひぅ、う……　あぅ」
「怖くないよ、僕がついてるから」
「この感覚、なんだろう……　あんっ、自分が、自分じゃないみたいだよ」
「絶頂……　イク感覚なのかな」
「やっぱり、そうなんだ……　あ、あんんっ、ん……　ひぁ、そこ、グリグリされると、イッちゃう。カ、カズヨシ君……　ん、んっ、ふぁう、う……　わ、私、イッちゃうよ……　ん、んあああッ！」
　一花の体が、びくんと強く跳ねた。
　小刻みに震えながら、びくびくっとまた跳ねる。
「軽くイッちゃった？」
「はあ……　はあ……」
　息を吐きながら頷く一花。
「キスより、気持ち良かった？」
「分かんないよ……　頭が、ぼーっとして……」
「今度は、直に触ってもいい？」
「ふえ……　？」
「もっと、一花のここを触りたいんだ」
「でも、汚れてるし……」
「僕の手は構わないけど、一花の下着は脱いだ方がいいかもしれないね」
　僕はショーツに指をかけて、ずり下ろしていく。
　一花は恥ずかしそうにしながらも、僕が脱がしやすいように、お尻

を振る。
「足、上げられる？」
「うん……」
一花の協力もあり、ショーツを脱がした。
「はあ……　はあぁう……」
「触るよ？」
「うん……　カズヨシ君の指で、さ、触って」
露わになった、一花の裂け目に触れる。
潤った局部を指で押すと、くちゅっと音が鳴った。
「んっ、ん……　ふあ、あ……　ぁ、カズヨシ君、わ、私の体、敏感なままだよ……」
「一花の、あったかいな。触ってるだけで、興奮するぐらい、気持ちいいよ」
「ひぁんん、カズヨシ君の指に、直接、触られてるよぉ……　ひぅ、うう、んっ」
柔らかな入口を押し開く。
そこに指を這わせると、硬くなったクリトリスに当たった。
「んくううっ、直接は、刺激が強いよっ、やさ、優しく、して……　あふぁぁ、あっ、ンン……　イッたばっかりで、体がおかしいよぉ」
鳴き声にも似た嬌声に、僕の血液は、ますます下半身に集まっていった。
一花はよがるように体を動かし、ズボンの中でクリトリスのように硬くなった陰茎を押し上げる。
「はあ……　はあ……　硬いのが、背中に当たってるよ」
「一花に興奮して、硬くなってるんだ。クリトリスと、同じように」
「こんなに、硬くなるんだぁ……　んっ、こ、ここで繋がるんだよね」
「それには、もう少し……」
敏感な場所や、ぬぷぬぷにぬかるんだ隠唇を弄る。
「カ、カズヨシ君、カズヨシくぅんん、ん……　っく、ぁぁっ、私、敏感だから、あ、あの、またすぐに、イッちゃいそうなの、だから……　だから……　そんな風に、い、弄っちゃ、らめ……　あふぁ、あ、

あっ……　ああン、ぐちゅぐちゅ言ってるよぉ」
「こんなに感じてるのにダメ？」
「だって、また、おかしくなっちゃう、カズヨシ君の指で、また……
イ、イッちゃ、う……　あん、んっ……　ふあ、あ、ああっ」
　僕はたっぷりとぬかるんだ膣に、指を挿入する。
「ふあ、あ、指が入ってくる、んあ、アア、カズヨシ君の指が、中に……
んっんあっ、はぁんんっ」
「キュウキュウ締め付けてくる。指が奥まで吸い込まれそうだ」
「そんな……　あ、あんん、はぁ……　んんっ」
　さすがに奥までは届きそうにないが、一花の中は、指を1本入れた
だけでギチギチだった。
「ん……　かなりキツイな」
「キツイと、ダメかな……？」
「いや、ダメというか、狭いと繋がる時に、一花が痛い思いをするかも
しれない。それが心配なんだ」
「だ、大丈夫だよ！きっと……　カズヨシ君を受け入れるため、
私……　少し痛くても平気だよ。それに……　私自身、カズヨシ君
と結ばれたいと思ってるから」
　頬を上気させて言われると、僕のリビドーが燃え上がってしまう。
「そうか……　じゃあ、その準備をしないとね。もっと一花を感じさ
せれば、入りやすくなると思う」
　一花の膣に入れた指を、ゆっくり出し入れする。
「あう、っ、んっく、ぅ……　んっ、ああっ、カズヨシ君……　カズ
ヨシ君っ、ンンぅ」
　ヌルついた愛液が、淫らな水音を立てて外に出てくる。
　僕はその蜜をかき出すように、指を抽挿し続けた。
「たくさん濡れて解れると、多少は痛みが減るはずだから」
「あん、あんんっ……　ん、分かったよ、ふぁ、ああっ……　ああ
んッ、確かに、す、少しずつ慣れてきたかも、あっ」
　自分の体を支えきれない一花は、ずるずると下がりながらも、必死
に倒れないように踏ん張っている。

「気持ち良すぎて、体に力が、入らなくなっちゃう……　んはぁ、あ……　あっあっ、カズヨシ君……　ん、く……　ぅぅんっ」
　ときどき包皮越しのクリトリスを撫で回すと、一花の体はビクンッと弓なりに反った。
「カ、カズヨシ君、んぁ、あ、あ……　私、あぁっ」
　秘肉を押し広げながら、膣口をいやらしく変形させてもう1本指を挿入していく。
「ああっ、太い……　い、んんんっ！」
　2本でキュウキュウだな。
　僕は一花が緊張しすぎないように、中でゆっくりと2本の指を掻き回した。
「もう少し、足、広げて」
　一花が言われたとおりに足を拡げたので、もう少し大胆に中を掻き回した。
「ああああ、やだぁ、いっぱい感じちゃうよぉ、カズヨシ君……　カズヨシ君……　あ、ああ、はぁ、ん、んっ。カズヨシ君、あ、あッ、私……　もう、ダメ」
「またイッちゃう？」
「うん……　私、私、またイッちゃう。カズヨシ君のえっちな指で、私、あ、あっ、カズヨシ君っ」
「一花……　っ」
「ああああん、カズヨシ君の指でイッちゃう、あ、あふぁぁ、あ……　ひっ、あん、ああアっ！さっきより、いっぱい、あっあっあああん！ん……　あ、っく、ぅ、んうううっ!!」
　一際高い嬌声と共に、一花の体が激しく痙攣した。
「はーっ、はーっ、また、イッちゃった……」
　また一花を絶頂させることができた。
「はぁっ……　はぁっ……」
　僕の指は、白く濁った汁で、とろとろになっていた。
「はぁ……　はぁ……　気持ち、よかった……　今度は、カズヨシ君の番だね」

「僕の？」
「私、こっちのお勉強はしっかりしてるから」
「えっと……　どんな内容かな？」
「お、男の人の……　を……　咥えて……　その……」
　さすがの一花も口に出して言うのは、恥ずかしいようだ。
「気持ちは嬉しいけど、でも一花にはあまり無理をさせたくないんだ。ましてや初めてだっていうのに」
「でも……」
　一花の腰が左右に動く。
「うっ……」
「とても硬くなっていて、苦しそうだよ。それに、私だってカズヨシ君を悦ばせたいよ。お、お願い……　どうか、やらせて」
　上目遣いで懇願してくる一花の申し出を、断れるわけがない。
「じゃあ……　お願いしようかな」
「うん」
　僕もズボンを脱ぎ、屹立したペニスを取り出す。
「……」
　一花がペニスを見つめたまま動かない。
　視姦されている気分なんだが。
「ど、どうかした？」
「こういう形……　してるんだね」
「あれ、詳しいのだと思ってた」
「そ、そんな事ないよ。み、見るのは初めてだもん。竿のような物と聞いてはいたけど、この形状は、太巻きの方が近い気がする。でも、黒くないし、先端は……　赤に近いね」
「詳細に言われると、結構恥ずかしいんだが」
「はっ！ごめんね、初めて見るから、つい。さすがに、少し、緊張するね。でも、頑張らせてもらうね。すー、はー。で、では……　い、い、いくね」
　逸物にずいっと顔を近づけてくる。
　うわ、一花の息がかかってーー

ぺちん
「ひあ」
ペニスが勝手に反応して、一花の柔らかな頬を叩いてしまった。
「ご、ごめん」
「う、ううん……」
びっくりしつつも、少し緊張がほぐれたのか、一花の顔の強ばりがなくなった。
「暴れん坊さんは、静めなきゃだね」
小さな口から舌を出して、竿にキスをする。
「ちゅ……ちゅっ、あったかい」
初めてなのに、一花にこんな事をさせてもいいのかと思う反面。
して欲しいという気持ちを優先させてしまう。僕って理性があんまないんだな。
一花は反り返るペニスを、ドキドキしながら見上げている。
「もっかい……ちゅっ、ちゅ」
今度は亀頭に、キスをする。
柔らかな上下の唇に挟まれるようなキスに、初めて一花の唇に触れたときの感覚が蘇った。
桜色の唇は、柔らかいだけでなく、ぷっくりしていて、性的だったからだ。
今度は唾液を含んだ舌が、裏筋を舐め上げる。
「れろ……れるぅ……ん、ちゅ、ちゅぅぅ……カズヨシ君の、ビクビクしてる……その……気持ちいい？」
「ああ。それに、ヤバイくらい興奮してる」
「カズヨシ君……」
一花が、僕のモノを舐めているなんて、信じられなかった。
「れろ、れろ……すごく、熱くなってきた……たくさん、気持ちよくするね……れるれる……」
初めは遠慮がちだった舌が、次第に大胆になり、ペニス全体に唾液を擦り付けてくる。
「んは……ちゅ、れろぉ……カズヨシ君の、大事なところに、キ

スが出来るなんて、幸せだよ……　ちゅ、ちゅぢゅ。こうすることが嬉しくて、イッたばかりなのに、カズヨシ君に触ってもらった場所が、ジンジンする」
「一花って、えっちなのかもね」
「わかんないよ……　でも、カズヨシ君とえっちなことをするのは、大好きな気がする……　んちゅ、ちゅ、れるれる……　んちゅ……　んちゅっ……」
　舌に力を入れて、くびれた部分を擦ってくる。
「う……　く……」
　性感帯を唾液でヌルヌルな舌で擦られて、思わず声が出てしまった。
「今の声……　気持ちよさそうだったね」
「一花が、あまりに気持ちいいことするから、声が出たんだ……　は……　あ……」
「良かった、初めてで不慣れだけど、頑張るね……　んちゅ……　ちゅっ……」
　さすがに勉強してきたというだけあって、ポイントを押さえている。普段の勉強もこれくらい身につけてほしいものだ。
　初めてなのに、一花にリードを許している気が……　けど、すごい気持ちいい。
「カズヨシ君の気持ちよさそうな顔を見ていると、いっぱい、きゅんってなる。まるで……　挿入するときに痛くならないように、体が、準備しているみたい」
「い、一花、それはエロすぎ……」
「ええ？だ、だってカズヨシ君が言ったんだよ」
　僕が言うのと、一花が言うのでは、随分違う。
　一花が言うと、とてもエロかわいいのを、彼女は理解していないようだ。
「ちゅ……　ちゅ、ちゅる……　ぺろ、ぺろ……　ん、カズヨシ君、ちゅっ、ちゅ……」
　ペニスが、一花の唾液で濡れて光っていた。

一花はときどき目を開けて、僕の反応を見て楽しんでいる。
「私の舌で、こんなに硬くなってる……　んちゅ、ちゅ……　れろ……　こういう勉強ならいいかも」
「勉強の成果が出ていて何よりだよ」
「でも、実際はやっぱり違うね。こんなに自分の体が熱くなるなんて、思いもしなかった……　はむ……　んちゅ、ちゅ……　んっぢゅ、ちゅっ」
一花は睾丸の方に顔を寄せると、根本も舐めてくれた。
「全部、きれいにするね……　れろ、んちゅ、ちゅる……　れるれる……　んはぁ、ん……　ちゅぅ」
袋の部分にも軽くキスをする。
「う、はぁ……」
相手が一花だからなのかもしれないが、付け根や玉の部分を舐められるのが、こんなにいいなんて、知らなかった。
「ちゅはっ……　んっちゅ、ぢゅ……　あんっ」
頭を前後にさせて舐める一花。
顔を離すと、糸が引いていた。
そうして再び鈴口を舐めたとき、眉が動く。
「んん……　味が付いたお汁が出てきたよ。なにかな、これは？」
ニヤリと笑みを浮かべながら一花が聞いてくる。
「分かってて聞いてるよね？」
「え～、分かんないなぁ。教えてくれたら、続きをしてあげる」
「くぅ……　先走りだよ。気持ちいいから、さっきの一花の愛液みたいに出てくるんだ」
「もー、最後の方は余計だよ……　けど、気持ち、いいんだね……　んちゅ、ちゅ……　ん、はぷ……　んぢゅるっ」
ぴちゃぴちゃと音を立てながら、感じる場所ばかりを舐められる。
やばい……　すごい、興奮する。
「一花、ちょっと口を開けてくれる？」
「？うん……　こう？」
女性器のような唇が開き、僕はその口内へ、ペニスを突っ込んだ。

「んふ、ううっ!?」
「ごめん。ちょっとの間、我慢して」
僕は一花の頭を掴むと、腰を前後に動かす。
「んっ、んちゅ、ぢゅぽっ、ぢゅっ、ぢゅぼっ」
一花の口内は彼女の膣のように狭くて、喉奥まで挿れると、口がいっぱいになってしまう。
「ん、んっ、激しい、れふっ、んちゅ、ぢゅ……　んっんっんっ、んぢゅうっ……　ぷちゅっ」
「う、うっ……　く」
独りよがりな行為だとわかっていても、あまりの快感に、その行為に耽ってしまう。
「はぁっ……　はぁっ……」
「んん……　まるで、口の中が、犯されているみたいらよ、ん、んぢゅ、んぐ、ん……　んぢゅ、ぢゅっ、こうやって、動けば、いいんらよね……　ぢゅっ」
一花は舌を裏筋に這わせつつ、亀頭を咥えて前後に頭を動かす。
僕の独りよがりな行動を窘めるのではなく、僕を良くさせようとしてくれる一花の気持ちがありがたかった。
「大丈夫らよ、私が、動くから……　ちゅ、ぢゅる、ぢゅ、ぢゅっぽ、ぢゅ……　はちゅぷちゅ、ぢゅ」
感じたこともない蕩けそうな快感に襲われる。
「はぷっ、んちゅ、ん……　どんどん、大きくなってふ……　ちゅ、ぢゅ、ちゅるる」
裏筋に這わせたままの舌がチロチロ動く。
時折、尿道口の方に舌を動かして、我慢汁をかき出すようにしていた。
ペニスが窮屈な穴で、舌に蹂躙されている。
そんな感覚に、犯されているのは、もしかして僕の方じゃないかと、思えてしまう。
「ん、んくっ、ん……　ちゅぽ、ぢゅっ、ぢゅるる、また、いっぱいお汁が出てきたよ……　ぢゅるるっ、ぢゅ、じゅるるるッ！」

「い……　ちかぁ……」
「カズヨシ君……　んっぢゅ、ぢゅ……　どうかな、私、ちゃんとカズヨシ君を悦ばせられてる？自分で動くより、いいかな？」
「ああ……　イイ……　すごい、イイ」
「じゃあ、あとは私に任せて……　んぢゅ、んぽっ、ん……　ぢゅ、ぢゅる……　んんっ」
「一花、本当に、初めて……　なの？」
「初めてだよ……　カズヨシ君を好きって心が、気持ちよくさせてるんだと、思うよ♪」
「そ、そっか……　く、はぁ……　ぅぅ」
「うん……　んっんく……　んぢゅ、ちゅぱ、カズヨシ君、大好きだよ、ッ、ン……　ちゅ、ちゅうう」
一花は夢中になって、口淫を続けた。
小さな唇は唾液まみれで、それがやけに卑猥に見えてしまい、僕はどんどん加熱していく。
「ん、ふ、んんっ、んぢゅ、ぢゅっ」
一花は興奮する僕の様子をペニスから感じ取っていて、淫靡に微笑みながら、容赦なく責め立てた。
「ちゅるるっ、ぐちゅ……　ちゅぷ、ちゅ……　んん、カズヨシ君……　んっ、ぢゅる、ぢゅるるるっ」
唾液まみれになっているのは、一花の口元だけでなく僕の根元も、ぬかるんだように濡れている。
僕達の体から、唾液がポタポタとベッド上に落ちた。
「んっ、ん……　んぢゅ、ぢゅぷ、ぢゅっ、カズヨシ君の、おいしいよ……　ぢゅ、ん、んっんっ」
飴を舐めるように、淫棒に舌を絡ませてくる。
「う……　あ……　こんなことまで、勉強して、たんだ、く、ぅ……」
「うん、一生懸命勉強したんだから。カズヨシ君に気持ちよくなってもらいたいって思ったから……」
一花は口内だけでなく、手も竿に添えて扱き、刺激を与えてきた。

扱きは別々でも、どちらも快感で、僕は一花にされるがままになってしまう。
「ちゅ、ぢゅ……　ぴちゅ……　はむ、んぅ、ん……　くちゅ……ぢゅぢゅぅぅ！んっ。ぢゅるるっ、カズヨシ君の、脈打ってる……ぢゅ、ぢゅぐっ」
「一花……　あっ、ぁ……　ッ」
「んぅっ、ん……　ぢゅ、んちゅっ……　ぷちゅ、ん、んっんっ、あぁん……　んぢゅぅ、ぁんんっ」
吸い付いたままの唇が竿を扱き続けて、僕はもう、半分イキかかっていた。
好きな子が、こんな事をしてくれるなんて。
しかも僕のために、勉強までしてきてくれて。
「んっぢゅ、ぢゅぢゅ……　カズヨシ、君、んはぁっ、ふぁ、んぢゅる、っ、んぐ、ぐ……　んんッ！」
「いっ……　一花……　っ」
一花は僕が感じる場所を執拗に責めてくる。
強弱を付けてくびれた部分を往復して、卑猥な音を立てていた。
「んぅっ、んっ、んっ、ん……　んぁんん、んっ、カズヨシ君、んぁ、あ……　あんん、ぢゅ、んっ！えっちなお汁、全部吸っちゃうね……　ちゅるっ、じゅるるっ、ぢゅ……　ちゅ、じゅるるるっ！んぢゅ、ぢゅ……　んじゅるっ！」
唾液ごと先汁を啜り、喉を鳴らす。
僕の全てを吸おうとしてくれる一花の愛情が、ダイレクトに伝わってきた。
「ん、んふぁ、ん……　んぢゅる、ぢゅるぷっ、お口の中が、カズヨシ君の味でいっぱいらよ……　はぁん、ぢゅ……　ぢゅ、はぷちゅ……　んくっ」
一花の口内に射精したい。
その気持ちが、一気に加速した。
僕が再び腰を動かして、一花の口腔を掻き回す。
「んぐ、んっ、ん……　ちゅぽ、ぢゅぽ、お口の中が、カズヨシ君で

いっぱいらよ、んぷっ、んっ！ぢゅ……　あぁんっ、ぢゅ、ぢゅぢゅうっ」
　一花の手が強弱を付けて扱いていたが、根元まで深く咥え込むので、手の位置が陰嚢に移動する。
　既に唾液まみれだった陰嚢を、一花の手が撫でるように優しく愛撫した。
「ちゅ、ぢゅ……　んふぅ、ん、ふっ、んん、んく、あぁ、んぁんっ、ん、お口の中で張りつめていくのが、わかるよ。カズヨシ君の、おっきい……　んは、んんっ、んぷ、ん、ぢゅ、ぢゅぷ……　んっ……　んふぅ」
「一花……　僕、もう……」
　一花は僕の切羽詰まった様子を感じ取って、手と頭の速度を増していった。
「うん、キテ……　お口にいっぱい出して……　ちゅ、ぢゅぅ、ん、ぢゅぐっ、ぢゅぅぅ、んぷ、ん、ぢゅぽっ、んっ、んうううっ！」
「出る……　ッ」
　一花の頭をしっかり支えると、迫り上がってきたモノを、彼女の喉奥で一気に射精した。
　どくんっ！どくどくっ、びゅるっ、びゅるっ！
「んうううっ！ん、んぷ、んぅぅ……　んっ、ん」
　一花の口の中に、思いっきり出してしまった。
　大量に出た精液は、一花の口からあふれ出てしまう。
　それがまた、とてもいやらしかった。
「大丈夫？」
「ん、んん……　んく……　っ、こくん。ごちそう……　さま、あふ」
「って、飲んじゃったの？」
「はぁ、はぁ……　だって、カズヨシ君の精液だよ。勿体ないから、全部飲んじゃった……　はふ。たくさん……　出たね♪」
「ごめんね……　一花の口が良すぎて、いっぱい出したかも」
「どうして謝るの？私、嬉しいよ。カズヨシ君を気持ち良くさせられ

て、幸せだよ。ただ……　私の身体、ずっと熱くなったままで、もうどうすればいいか……」
「それは……　一花、一つになりたい。駄目かな？」
「でも、今射精したばっかりだから、すぐには……　あ」
　射精しても隆起したままのペニスを見て、一花は言葉を止めた。
「カ、カズヨシ君は、大丈夫みたい……　だね」
　そのまま一花をベットの上に仰向けに寝かせた。
「うぅぅ……　恥ずかしいよ」
「かわいいよ、一花」
　髪や頬にキスをする。
「ん……　んぅ……」
「今更だけど、本当に、最後までしていいの？」
「うん」
「今なら、まだ止められるよ」
「部屋に来る時、覚悟はしてきたから……　カズヨシ君に私の初めてをもらってほしい……　だから、止めるなんて、言わないで」
　うっすら涙ぐむ一花に思わず慌てた。
「カズヨシ君……　大好きだよ」
「一花……」
　僕は一花の頭を撫でた。
「意外に恥ずかしがり屋の一花にそこまで言われちゃね、僕は幸せ者だよ」
「むぅ～……　やっぱり一言余計だよ」
「ごめんって」
　そこで僕は一花の鎖骨に顔を寄せた。
「一花……　ワイシャツ脱がすよ？」
　ワイシャツを脱がすと、そこにはブラを着けていない乳房が、呼吸に合わせて上下している。
「うぅぅ……　やっぱり、恥ずかしいよぉ」
「触っても、いい？」
「……　うん」

許可をもらった僕は、一花の乳房にそっと触れた。
「すごい……　一花のおっぱい……　ふかふかだ」
そして、かわいらしい乳首を口に含んだ。
「あぁんっ……　カズヨシ君っ……　カズヨシ君っ！」
ちゅぱっ、ちゅぷっ……
口の中で一花の乳首が硬くなっている。
それを舌先で柔らかく転がすと、一花の体がブルブルと震える。
「きゃうっ……　あ……　あ……　感じすぎて、ダメ」
一花は背中を反らせて、身悶える。
「んひゃう、う……　あ、ひぁ、ンああっ、やぁっ、お腹もジンジンしてきたよぉ。あんっ、カズヨシ君のが欲しい……　カズヨシ君と繋がる準備、出来てるよ……　早く……　早く……」
涙目でせがむ一花を見ているだけで、爆発しそうだ。
「分かった。けど、痛かったら言ってね？」
「うん……」
僕は自分の手でペニスを掴み、ぬるりとした愛液をすくい取り、竿を濡らす。
亀頭を割れ目に押し当てると、蜜液に導かれるようにペニスを挿入していった。
「あぐうう……　ッ！あっ、あああっ、くっ」
これは、想像以上に狭い……　ッ！
指２本でギチギチだっただけのことはあり、濡れているはずなのに、すんなりと入らない。
僕は小刻みに出し入れをしながら、ゆっくり押し入れていった。
「んくぅぅ、う……　ぅ……　ッ、あっあぁーっ」
一際狭いところに当たり、そこを貫くと、繋がった場所から、愛液に混ざって血が流れた。
僕が、一花の初めてを……　もらったんだ。
「一花……」
「カズヨシ……　君……」
「一花の初めて、もらったよ」

「うん……カズヨシくんに捧げることが出来て、嬉しいよ……んっ、く……んんっ」
一花は涙目になりながらも、嬉しそうだった。
「あまり痛みを減らせなくて、ごめんね」
「平気だよ……痛みより、幸せの方が、ずっと、ずっと、上だから……う……っく、うぅ……この痛みも、カズヨシ君と繋がらなかったら、感じることのなかったモノだよ。カズヨシ君、ありがとう」
「僕の方こそ、ありがとね」
僕はなるべく痛がらないように、ゆっくりと、最奥まで挿入していった。
「あぐっ……カ、カズヨシ君っ」
「奥に、入ったの、わかる？」
「うん……カズヨシ君の先端が、私の奥を押し上げてるよ……んっ、く」
一花の窮屈な膣中が、一層狭くなった気がした。
「あんんっ、ん……あ……はぁ、ああ……」
何度も内奥を小突く。
そうしているうちに、痛みだけだった声も、艶が混じるようになっていった。
「カズヨシ君に動かされてると、段々と、痛くなくなってきたかも……」
「良かった。今日はまだ、気持ち良くなれなくても痛みが引いてくれれば、それで……」
「でも、カズヨシ君は、私の体で、いっぱい気持ち良くなってね」
「一花の体に、無茶はさせられないよ」
「ダメ。私で気持ち良くなって。それが私にとって幸せなの。お願い……カズヨシ君の思うように、動いて」
一花は少し腰を浮かせて、前に突き出すようなポーズを取る。
「ね……いっぱい動いて」
言われたままに動かしてみると、動きやすかった。

しかも、更に気持ちいい。
「んはあああ、あっ……あっ、あっ……」
僕は突きだした腰を、やや強引に引き寄せて、いやらしい肉壺を押し分けて、貫き通した。
「奥、何度も来てる……あっあっ、んああっ」
「ふ……んっ、んうっ！」
「カズヨシ君の硬いのが、何度も……ひあっ、あ、んああ……あ、ああッ！ん、お腹の中、出し入れしてる……あ、あ、っく」
「一花の中も、むちゃくちゃ気持ちいい……よ……あ、ああっ」
「気持ちいいって言ってくれて嬉しいよ。好きな人と繋がるって、凄い……幸せが、無限に広がっていくみたい」
「それは、僕も感じてるよ、我を忘れそうなくらい幸せで……一花を、壊したいくらい、愛したい」
一花は自ら両足を更に拡げた。
「いいよ……壊れちゃうくらい、いっぱい、えっちなことして……」
「一花……」
僕達は繋がったまま、たくさんキスをする。
「ちゅ……ちゅ、んちゅ……んんぅ、んっ、カズヨシくぅん……んちゅる、ぢゅ……んっんっ」
重なる唇はやっぱり気持ち良くて、絡み合う唾液は、甘かった。
「ん、ちゅぷ……ん、ん……カズヨシ君……カズヨシ君……ちゅ、ちゅ……れろ、れるれる」
乳首を指で摘まみ上げるように挟むと、一花の体は小さく痙攣した。
「おっぱいは……はぁぁん、ん……あ、ああ」
ダメと言いたいようだが、体は敏感に反して竿を締め付けてくる。
僕は手を結合部に移動させた。
ぎっちり咥え込んで、肉竿の形に歪んでいる裂け目を、更に拡げてみる。
「んふぁ、ああ……あっ、拡げられちゃってる、あ……あんっ、

カズヨシ君に丸見えだよ……　あふぁぁ」
「ああ、ばっちり見えてる」
「ふあ、あ……　あっ、あ……　恥ずかしいよ、でも、体が言うこと聞いてくれない……　私が欲しいのがなんなのか、本能がわかってるみたい」
「一花……」
　なんてエッチなんだ。
「ごめんね……　でも、痛みより、気持ちよさの方が、増してきて、私、私……」
「じゃあ、一緒に気持ち良くなろう」
「うん……　んっ、はぁ、あ……　あんっ、んっ」
　抽挿して何度も奥をノックすると、一花の膣内もペニスを締め付けてくる。
「ああ、あ……　やっぱり、カズヨシ君と、こうして、せっくすしてるなんて、夢みたい」
「夢じゃないよ」
「うん……　眠りから覚めたら夢だったなんて、困っちゃうよ」
「僕もだよ」
　ピストン運動を続けると、一花が喘いだ。
「ふあ、ああ……　あんっ、ん、さっきから、体がイキそうになってる……　ん、あ、あ、さっきイッたのに……　んあ、んんっ」
「じゃあ、今度は一緒にイこう」
「カズヨシ君と……？うんっ」
　いつの間にか、繋がった部分はヌルついた愛液で、スムーズに出し入れ出来るようになっていた。
　僕は一花を掴み、その動きを速めていく。
「ひ、あ、あっあっ、カズヨシ君と繋がった場所から、音がたくさん出て……　あんんっ、んはぁ、私、いっぱい濡れちゃってるね」
「多分、僕も先走りが出てると思う」
「じゃあ、カズヨシ君と私のが、混ざり合っちゃってるんだね……　んっ、んはぁ、あ……　んんっ」

「そうだね、混ざり合っているね」
「うん……　んはっ、あ……　あ、あぁっ、もっと……」
「ああ。もっとかき混ぜよう」
「お願い……　んううっ、んっ、あ、あっ、カズヨシ君の、は、速い、あっあっあっ……　ッ！」
　肌を打ち付ける音が、次第に大きくなっていく。
　溢れる愛液も、体液と共に弾けた。
「好き……　カズヨシ君が好きだよ、好き、好きっ」
「僕も好きだ、一花……　一花、一花っ」
「カズヨシ君、カズヨシ君っ！ふぁあっ、ああっ、あ、あっ、んああっ、あ……　幸せだよぉ、私、あん、カズヨシくぅぅんっ」
「一花っ」
　夢中になって膣内を貫く。
　膣肉の締め付けに、僕はもう果てそうだった。
　一花に射精したい。
　僕の思考は、その想いで塗り潰されていく。
　余裕なんて、全くなかった。
　情けないほど本能のままに腰を揺らして、一花の奥まで、何度も突いた。
「はぁっ……　はぁっ……　一花……」
「カズヨシ君の、中に、ちょうだい……」
「いいの？」
「うん、カズヨシ君の、中に欲しい。カズヨシ君の精液で満たされたいよ、お願い、んっ、あ、あっ、んはっ！あっあっ、んんんっ」
「わかった」
　僕の方も、途中で抜くなんて勿体ないことは出来そうになかった。
　僕は一花の体を引き寄せるようにして下半身を打ち付けて、内奥までペニスを突き立てる。
「あ、あ……　カズヨシ君っ、んはっ！あ、ああっ」
「一花、僕、また……」
「イキそうなんだね、私もだよ……　んっ、はっ。カズヨシ君、あ、

あっイッちゃう、また私、今度はカズヨシ君のでイッちゃ、あ、あ、ひぁぁっ、んあっ、あっあっあっ……ん、はあああうう!!」
「う……く、ああ……ッ」
どくんっ、どくくっ、どくっ……！
射精の直前に最奥まで挿入した。
「ふあ、ああ……あふぁ、あ、あんんっ」
夥しい量の精子が、亀頭の先から、一花の膣内めがけて放たれていく。
「んあっ、あ、ああああ……出てる、んふぁ、カズヨシ君の精液が、中に、あんっ、ん、んうっ」
僕は繋がったまま、一花の下半身を少し上げる。
そうすることで、少しでも精液を、一花の奥に流し込んでいった。
「あっ、んあ……う……カズヨシ、君……」
僕は最後の一滴まで送り込むように、射精しながらも、膣内に出し入れし続ける。
一花の膣壁は、そんな僕が吐き出した精を、最奥に送り込むように動いていた。
「カズヨシ君……んっ、ああ……あ……まだ、出てる……凄いよ……んっ、く、はぁ」
ようやく全てを射精し終えると、ペニスをゆっくり引き抜いた。
こぽっと、一緒に精液が溢れてくる。
「んはぁ……お、お尻の穴に、熱い精液が、たれてくるよ……あ、んはぁ、あ……あ……」
一花が処女だった証も、一緒に垂れた。
「カズヨシ君の、お布団、汚しちゃったね……」
「洗えば平気だって」
「……血、落ちるかな……」
「あ……あー、なるほど。まあ、大丈夫でしょ。一花は気にしないで」
「うん……」
見つめあう僕達は、そっと唇を重ねた。

ふと時計を見ると、もう日が変わって大分経過したようだ。
「……こんなに長い時間、愛し合っていたんだね」
「ふふっ、そうだね。お互い、夢中だったから……」
「やばい。僕はますます、一花に夢中になっちゃうかも」
「わ、私も……だよ」
そうして、僕達はまたキスをする。
「ん……ちゅ……誰かとこんな風に愛し合うなんて、少し前までは、全然想像もしてなかったよ……私、今は心も体も満たされて、とっても幸せだよ」
一花は微笑み、涙を流す。
「今まで生きてきた中で、最高に幸せな日だよ」
「僕もだ」
一花の隣に寝転がり、抱きしめ合う。
僕にとっても、最高の日になった。
恋人と初めて結ばれた夜。
一生の思い出になりそうだ。
「一花」
抱きしめながら、彼女の手を握る。
「カズヨシ君……」
一花が僕の手を、優しく握り返してきた。
その手の温かさに、心の中が温かくなった。
僕が手に入れた、この幸せ。ずっと守っていこう。一花を悲しませないでいこう。
そう思いながら、そっと瞳を閉じるのだった。

一花のご奉仕

五つ子の合宿が決まった日の次の登校日。
今日も一花は仕事に行っている訳なのだが、その一花から放課後になったら中野家に来てほしいと連絡があった。
他の姉妹は合宿という事で直江家にいるので帰ってくることはない。それを狙っての呼び出しだろうが、あまり長い時間いることは出来ないだろうな…
そんな考えで中野家の一花の部屋に案内されたのだが…
「これはヒドイな…」
「ぶぅー、これでも片づけたんだよ?」
これでか… なるほど、風太郎が汚部屋とよく言っていたのは納得だ。
目の前には見事に散らかっている部屋の光景が広がっている。
「はぁぁ… それで?僕をここに呼んだのは片付けの… んっ」
「ん…… んん…… カズヨシ君…… ちゅ…… ん、んン…… 好き。大好き……」
片付けの手伝いのために呼んだのか、と聞こうとしたところで唇を塞がれた。
「相変わらず、一花はキス好きだね?」
「うん…… カズヨシ君は?嫌い?」
「いいや。僕も一花とのキスは大好きだよ」
そう言って今度は僕からキスをした。
「んぅ、ん…… ちゅ…… ん、ちゅ…… んん…… ん、カズヨシ君……」
一花の目はすでにトロンとしている。これはキスだけでは収まらないかな。
そんな風に考えていると一花の手が僕のものを撫でだした。
「ふふっ、ここ…… 硬くなってるよ?期待してる?」
「ん…… それは一花との情熱的なキスのせいだよ。一花だって期待してるんじゃない?目がトロンとしてるよ?」

軽くキスをしながら伝えると恥ずかしそうに顔を下に向ける。
けれども、ズボンの上から撫でる手はそのままだ。
「ふふふ…　たしかに、私の方が我慢できないかも……　ねえ？今日は私からしてもいいかな？」
一花にそう聞かれたため、コクンと頷くとベッドに座るよう促された。
「これでいいのかな？」
「うん……　じゃあ、カズヨシ君のことめいっぱいご奉仕してあげるね」
一花は僕の前に跪くと、服の前を開いた。
たわわな乳房が、プルンと零れ出る。
「……　っ！」
それを見ただけで、条件反射のようにビクンとペニスが反応する。
「あは……　まだ出してないのに、ズボンの中でピクピクしてる。苦しそうだから、出してあげるね」
一花はズボンから硬くなった僕のペニスを取り出し、そして……
ふにゅっ
「い、一花っ!?」
なんとおっぱいで挟んできた。
「お、男の人はこういうのを喜ぶって……　前に勉強したの。カズヨシ君は、どう？おっぱいで挟むのは好き？」
ふにゅふにゅと挟まれるたび、ペニスが反応してしまう。
とんでもない感触と弾力だよ。
「う、うん。好きかも……　柔らかさが気持ちよくて、すごく興奮するよ」
柔らかくてしっとりとした膨らみが、優しく刺激してくる。
「ふふっ、私も興奮しちゃうかも……　だって、カズヨシ君の、こんなに硬くなってるんだもん」
一花は胸を擦り合わせながら、ゆっくりと口を開く。
「んんっ、ちゅっ、ちゅぶ……　っ」
胸の谷間からはみ出た先端をぱっくりと咥えられてしまった。

「くぅ……っ！」
柔らかな刺激に加えて、熱いぬめりが僕を包み込む。
「ちゅぱっ、ちゅっ……んっ、じゅるるっ、ちゅっ、はぁん。あふ、やっぱり大きぃ……ちゅっ、お口がいっぱいになっちゃう、ちゅぱっ、ちゅるる」
「そんなに頬張って、苦しくない？」
一花はめいっぱいペニスを頬張り、少し苦しそうな表情になっていた。
「んぐっ、じゅるる……ちゅっ、ちょっとだけね……んちゅっ、ちゅぱ。でも、カズヨシくんのをたくさん受け入れたいから、平気だよ。ちゅるるっ、じゅぶっ、じゅるる」
乳房を押しつけるようにしながら、一花は喉深くまでペニスを飲み込む。
柔らかな乳房と喉で締め付けられて、たまらなく気持ちがいい。
「う、うう……」
「んふ、カズヨシ君声が出てる……ちゅぱ、ちゅっ……嬉しい、んんっ。ちゅぱっ、ちゅ……んんっ、あんんっ、カズヨシ君の熱くて、あふっ、口が蕩けるぅ、ちゅぱっ、ちゅぱっ」
慣れて来たのか、一花はやがて眼を細め、うっとりした表情になる。
「……っ、そ、そんなに深くまでっ、大丈夫？」
僕が心配になるほど深く、ペニスを口内に受け入れていた。
「あは……♪ちゅっ、口に入ってるのになんだか気持ちよくなって……あふぅ、こうしてるとカズヨシ君と繋がってるみたい。じゅるるっ、ちゅっ、ちゅぶぶ……んっんっ……あんっ、きもひいいの、じゅるる」
ねっとりと舌を絡ませながら、一花は僕へ奉仕を続けた。
「あっ、く……っ、ぼ、ぼくも気持ちいいよ、それ、堪らないっ」
「ホント？じゃあもっとするね……ちゅるるぅ、れろ……んちゅっ、ちゅぱっ、ちゅぱっ」
派手な水音を立てながら、一花は顔を上下に動かした。
胸を竿に強く押しつけ、興奮したように激しく揉みしだく。

「ちゅっ、ちゅっ、じゅるる……　あんっ、んっ、あふぅ……　ぴちゃ、ちゅるる、んちゅっ」
　僕と一花の息がどんどん荒くなり、やがて激しさはピークに達した。
「く……　ううっ、イクっ!!」
「んんっ!?んくっ、んっ……　じゅるる……　あふぅ」
　一花は突然の射精にもかかわらず、しっかりと口で受け止めてくれた。
「んくっ、んく……　ちゅるる。あふっ、味が濃いぃ……　んちゅっ」
　喉を鳴らしながら、一花が僕の精子を飲み込んでゆく。
「んっ、んっ……　はぁん……　ちゅっ、カズヨシ君の精液……　全部……　飲んじゃった♪」
　少しだけ零れた白濁液が胸に掛かり、一花の妖艶さに輪が掛かっていた。
「す、すごいね……　前も飲んでくれたよね」
「うん、たくさん出たよね。前も言ったけど、勿体ないしね。それに、全て受け止めたかったから」
　頬を赤らめ、一花がもじもじと内股を擦り合わせる。
「一花、ありがとう……　今度はこっちに来て」
「あっ、カズヨシ君……　っ」
　座ったまま、一花を抱き寄せた。
「一花、僕の膝の上に座って」
「う、うん……」
　一花が僕の膝の上にちょこんと僕に背中を向けて腰掛ける。
「……　脱がせるよ?」
「あぁっ……　やっ、やっぱり恥ずかしいよっ」
　ズボンと下着を一気に引き抜くと、ぬるりとした透明な糸がしたたり落ちて来た。
「あふっ、こ、こんなに濡れちゃってる……　あまりみないでぇっ」
　真っ赤な顔を手で覆ってイヤイヤをする一花。

「すぐに濡れちゃう一花も、僕は大好きだよ。僕に奉仕してくれただけでこんなになるなんて、すごく嬉しい」
指で濡れている部分を撫でるように触る。
「あぁっ、カズヨシ君に言われると、う、嬉しいけど……　あふっ。やっ！んっ、あぁぁん……　あふぅ、や、やだ、すごくエッチな音がしてるよぉ、んんっ！」
指で軽くかき混ぜると、くちゃくちゃと裂け目から水音が聞こえる。
「あんっ、あっあっ……　ダメぇ、はぁっ、はぁ……　恥ずかしすぎるぅ」
一花が悶えて、僕の手を挟み込んでくる。
「一花が感じてくれてる音だから、恥ずかしくないよ。僕はもっと聞きたいな」
指を軽く挿入すると、つるりと飲み込まれる。
「きゃぅぅっ！ぁぁんっ、指入ってるぅ。あっあっ、んっ、ゴツゴツして気持ちいい……　あぁっ」
挿入された指を一花はすぐに締め付けて来た。
本人は恥ずかしがっているのに、内部は積極的にキュウキュウ締め付けてくるのがとても可愛らしい。
「一花の中も気持ちいいよ。指に吸い付いてくるみたいだ」
指先で肉ヒダを掻きわけるように刺激してゆく。
「ふぁぁぁっ！あぁんっ、はぁっ、あふぅぅ……　っ！」
指をくねらせるたび、一花が甘い声を上げる。
「あんっ、んくっ！ゆ、指曲げないでぇっ、くぅぅんっ、やっやぁっ、そこ感じ過ぎちゃうからぁ！」
曲げた指先がポイントに当たったらしく、一花はビクビクと腰を震わせた。
「そっか、ここが感じるんだね」
一花が反応した部分を、指で優しく刺激してやる。
同時に親指を使って、肉芽もくすぐった。
「あぁぁぁんっ！ああっ、ダメぇぇぇっ、イッちゃうぅ、い、弄られた

ら……　やぁぁぁっ、出ちゃうっ、あっ、ふぁ、あぁぁんっ、んぁぁっ！」
「わわっ!?」
一花の裂け目から、噴水のように飛沫が飛び散った。
「うっ、うぅっ……　は、恥ずかしいっ、感じ過ぎて出ちゃった」
一花の甘酸っぱい香りが辺りに広がる。
どうやら潮を噴いてしまったらしい。
「気持ち良かったんだね。一花が気持ちよくなってくれると僕も嬉しいよ……　そして興奮する」
そそり立ったペニスを、一花の股の間から出してみせる。
「あぁん……　す、すごい、カズヨシ君ってば、またこんなに大きくなってるっ」
「うん……　今度はこっちを一花の中に入れるね」
ペニスを一花の入り口に押し当て、腰を送り込んだ。
「はぁっ、あっあっ……　あぁぁん！んっ、熱くて硬いのが……　ふぁぁっ」
ペニスに押し出され、一花の中から蜜が溢れ出した。
相変わらず一花の中は狭いが、潮を噴いてしまうほど感じてくれてからか、以前よりもすんなり挿入できた。
「あんっ、んっ、あふぅ……　やんっ、お腹の奥、当たって……　あぁんっ」
一花の腰を落とすと、自然と奥へとペニスが入り込む。
「うん、一花の奥に、コリコリ当たってる。苦しくない？」
「んっ、あんっ……　あぁっ、く、苦しいよりも……　んっ、あぁん、感じて……　ふぁぁっ」
僕にしがみつきながら、一花が悶える。
「んっ、あっ、あぁんっ、さっきのところにも当たってるのっ、やぁっ、熱いのが擦れてるぅっ。はぁんっ、んっ、あぁぁんっ、はぁっはぁ、あふっ、んんっ！」
下から軽く突くと、一花は堪らずイヤイヤをする。
「あんんっ、あっあっ、奥……　すごいのっ、んんっ！くぅぅんっ、

あぁんっ、ど、どうしよう……」
「ん？何がどうしようなの？」
喘ぎながら、一花が困惑したように漏らす。
「あんんっ、んっ！私、敏感すぎて……　はぁぁんっ！あふっ、す、すぐにイッちゃいそうっ。んっ、あっあぁん、んぁぁっ」
時々軽く達しているらしく、膣内が小刻みに震える。
「ん……　さっきイッたばかりで中が敏感になってるのかもね」
「んっ、んんっ、そうかも……　あふっ、擦れるだけで、感じちゃうぅっ」
一花の膣内はどんどん熱く火照り、痛いほどに僕を締め付けてくる。
一花の身体ごと揺らすようにして、激しく突き上げてゆく。
「やんっ、あっあぁぁぁっ！はぁんっ、やぁっ、カズヨシ君っ、激し……　あぁぁんっ！」
「く……　ゆっくりがいい？」
「あふっ、ああんっ、いいよっ……　はぁっ、激しくしてぇ……　カズヨシ君っ……　ああっ。わ、私を壊して……　ああんっ、いいのぉっ、全部っ、ぜんぶ、カズヨシ君のなのっ！あああっ、ひゃあうんっ！」
「壊さないよ……　一花を大切にする。ずっと」
「あーっ、あーっ、やああんっ、そ、そんなこと言われたら……　ああっ、し、しあわせで、身体が……　っ、あああんっ！とろけちゃうようっ……　ああんっ、とろけて、カズヨシ君のまざっちゃうっ、ひゃううんっ」
「いいね。一花ととけあいたいよ」
快感に僕の脳みそも溶け出してしまいそうだよ、一花。
「いっちゃ、言っちゃ、ダメ、ダメっなの……　はあああああんっ、ああっ、らめぇ……　らめになるぅ……　ひゃあふぅぅっんん！あふっ、んっ、んんっ、あっあっ……　カズヨシ君……　はああんっ、気持ちいいの来ちゃうぅぅっ！」
一花の膝がガクガクと震える。

身体に力が入っているらしく、つま先がぴんと伸びていた。
「カズヨシ君っ、はぁんっ、あぁっ……　いいよぉ……　ああっ、気持ちいいっ！あっあっ、イクイクっ……　あぁぁっ！」
僕の手を強く握り、一花が切羽詰まったように声を上げた。
「はぁんっ、あっ、あぁぁぁん！やぁっ、んっ……　くぅぅぅん！ふぁぁっ、んっ、あぁぁんっ！イクっ！あんっ、頭……　真っ白になってるぅ、あふぅぅぅぅ！」
「くぅぅっ……　僕もっ、イクっ!!」
一花をしっかり抱えたまま、僕はがむしゃらに腰を動かした。
「イクっ、はぁぁんっ、イクぅっ！カズヨシ君……　いっしょ、いっしょに、あんっ、あぁぁん、一緒にイッてぇぇぇぇぇっ！あんんっ、あんっ、はあああっ、カズヨシ君っ、カズヨシくぅぅんっ、カズヨシ君のが、いっぱい！中に……　はあぁぁんっ」
僕がどくどくと精を注ぎ込むのと同時に、一花は大きく達していた。
「やっやっ、す、すごく奥……　熱いよっ、ふぁぁっ、やぁっ……んんっ！あっあんんっ、カズヨシ君のまだ硬い……　はぁんっ」
未だに脈を打つペニスの感覚に、一花はうっとりと眼を細める。
「びくんびくん震えて……　んっ、もっとしたいって言ってるみたいだよ」
「一花……　このままもっと抱いてもいいかな？」
僕が尋ねると、一花は耳まで赤くして頷く。
「うん……　私も今、おねだりしようと思っていたの……　はふっ」
「一花のおねだりにめいっぱい応えないとね」
僕は身体を起こし、一花をベッドに押し倒した。
「あぁんっ、そんな、めいっぱいだなんて……」
一花は嬉しそうに眼を細める。
横たわった事で、乳房がぷるんと大きく揺れた。
「一花のおっぱい、美味しそうだ」
顔を近づけ、揺れ動く乳房をぺろりと舐める。
「きゃっ！んっ、あぁぁぁっ……　くすぐった……　んっあふぅっ」

「一花から、すごくいい匂いがする。ん……」
甘い匂いがする膨らみを、ぺろぺろと舌でくすぐる。
「ふぁぁぁっ……　あぁんっ、やっ、く、くすぐったいけど……　あんっ！」
舌が這うたび、一花はくすぐったそうに身を捩った。
「けど……？」
「ゾクゾクして、感じちゃう……　んっ、あっ、あぁぁんっ」
胸の突起がぴんと尖り、ふつふつと乳輪が粟立ってゆく。
愛らしいその蕾を、ちゅうちゅうと吸ってみる。
「やぁぁんっ、んっ、あぁんっ、吸っちゃダメぇ……　はぁんっ、んんっ！あぁっ、んっ……　はぁっ、あふぅぅぅ！」
乳首を吸っているうちに、一花の体温が高まってゆく。
脚の間から見える裂け目はぱっくりと口を開き、僕を待ちわびているみたいだった。
「一花……　このまま繋がるよっ」
片方の脚を抱えたままで、一花の中へ剛直を突き入れる。
「えっ、こ、この体勢で？んっ……　あぁぁっ！ふあぁぁぁっ!?んぁっ、やっ、あぁぁんっ！」
じゅぶりと大きな水音がして、一花の蜜と僕の精液が押し出されてゆく。
「はぁぁぁん……　んん！あぁっ、す、すごい奥まで……　んんっ!!はぁっ、んっ、あっあっ……　やぁぁぁん、こ、これ、いつもと感じが違うかも」
奥まで入れると、一花が少し苦しそうに吐息を漏らす。
「んっ、変な感じがするの？」
「う、ううん。んんっ、は、初めての角度で……　あっあっ……ちょっとだけ、苦しいかも、んんっ」
「そっか、じゃあ少し変えてみるよ……　んっ」
腰を動かし、わずかに挿入角度を変えてみる。
「あっ……　あぁっ、そ、そこは平気かも……　んっ。ふぁぁぁ……　んっ、あぁぁんっ、あんっ！」

今度は苦しくないらしく、一花の声が少し甘くなってきた。
「んっ、あぁぁっ……　あっ、あふっ、はぁんっ……　き、気持ちよくなってきたよ、ふぁぁっ」
「一花はここに当たるのが好きなんだね？」
一花が好きなポイントを探りつつ、再び乳首を吸ってみる。
「きゃっ！あぁぁぁっ！す、吸いながらは……　ふぁぁぁっ！あんっ、あっあっ、両方されたら、んんっ、気持ちよすぎちゃうぅ、あぁぁぁんっ」
「ん、じゃあもっとするよ……　ちゅ」
抽挿を繰り返しながら、軽く乳首を甘噛みする。
「きゃうっ！あぁぁっ、ふぁぁぁっ！ち、乳首噛んじゃダメぇ……　やっ、あっ、あぁぁんっ！」
ビクビクと一花が身体を震わせて、ペニスが締め付けられる。
「ごめん、痛かったかな……」
今度は甘噛みしたところを、優しく舌で転がす。
「あぁぁん！あっ、あふぅぅっ！はぁん、やぁ、ジンジンするぅぅっ。あんっ、あぁぁぁんっ、そこ、敏感になってるからっ、あぁん、気持ちよすぎちゃう……　ふぁぁぁんっ」
ぷっくりと尖った乳首を吸いながら、激しく抽挿を繰り返す。
「きゃっ、んっ、あぁぁぁん！カズヨシ君っ、激しい……　ふぁぁぁ、あふぅ！やっっ！んっ、あぁぁぁん、だめぇっ、そんなにされたらっ、あふぅ、おかしくなっちゃうぅぅ！」
一花が僕にしがみつき、またガクガクと膝を震わせる。
「ん、乱れる一花も可愛いよ、ちゅ……」
胸の谷間に流れ落ちる汗を吸いながら、裂け目を大きくかき混ぜてゆく。
「んんっ、あっ、あぁぁん！はぁはぁっ……　あふっ、んん！やんんっ、はぁん、可愛いとか言われたら……　キュンキュンしてきちゃう……　あっあっ、あふぅっ！くぅぅんっ！」
蜜と精液が混ざった物が、一花の太ももを伝わり、ベッドへ落ちてゆく。

「はぁっ、んっ、あぁぁぁっ……カズヨシくぅぅん……好き……大好きぃ……」
瞳を熱く潤ませて、一花が囁く。
「……っ、僕も一花が大好きだっ！愛してる……」
自分の気持ちをぶつけるように、更に彼女の奥を貫く。
「あ…愛してる……私も、私もっ！カズヨシ君、カズヨシ君……！カズヨシ君を愛してるぅっ！」
「一花ッ！」
「あぁぁぁっ！う、嬉しい……んっ、あふっ、嬉しすぎてまたイッちゃうよぉぉっ！」
一花の奥がヒクヒクと震え、限界を知らせてくる。
「やぁぁぁんっ、んっ、カズヨシ君っ、愛してる……っ！」
「一花……んっ、僕も愛してる……っ」
抽挿のスピードを上げながら、そのまま僕達は絶頂へと向かう。
「あぁぁんっ、イク……イクぅぅ！カズヨシ君……来てっ、私の中にまた注いでぇっ！」
「くぅぅ……!!」
剛直を突き入れたまま、僕は一花の膣奥へ精液を放った。
どくんどくんと、大量の熱い物が迸る。
「あぁぁぁっ！やっ、カズヨシ君のが出てる……熱い……あぁぁんっ」
一花の膣内に精液が全て吸われてしまいそうだ。
「はぁぁ……イキ過ぎて……もう……おかしくなりそう……」
「ごめんね。ちょっと無理させ過ぎたかも」
ぐったりの一花の頭を撫でながら、唇にチュッとキスをした。
「あはは……大丈夫だよ……カズヨシ君が、気持ちよかったなら、ね……んっ……ちゅっ……私も気持ちよかったよ？」
そう言いながらまた一花からもキスをされるのだった。
……
その後、部屋を片づけてからベッドに二人で寝転んでいる。

その…　シーツを駄目にしてしまったのと床もビシャビシャにしてしまったので、急遽洗濯とか掃除をしなくてはならなくなったのだ。
「うふふ…」
「機嫌よさそうだね一花」
「そりゃあ、こうやってカズヨシ君を独り占めできるんだもん……ごめんね、普通のデートが出来ればいいんだけど…　っ」
　僕はそこで一花の唇に指を付けて言葉を止めた。
「全然、そんな事思ってないよ。僕は女優として頑張ってる一花が大好きだから。それに、こうやって僕だけが見れる可愛い一花も独占できる訳だし」
「もー……　えっち……」
「ふふっ。さて、そろそろ帰らないと皆から何言われるか分かったもんじゃないからね。行こうか」
「うん！」
　起き上がった僕は一花に手を差し伸べて起き上がらせる。
「よし、じゃあ行こう」
「うん。あ、あと一回だけ……　ん」
　そう言った一花は軽く僕の唇にキスをしてきた。
「ふふっ、やっぱりカズヨシ君とのキス大好きっ！」
　屈託ない笑顔でそう言われると僕からは何も言えないな。
「あ、そうだ。一花は日の出祭来れそうなの？」
「う～ん、仕事が入ってるからなぁ。行けたら行くよ！カズヨシ君と回りたいしね」
「そっか…　僕も一花と回りたいな」
「うんっ！」
　手を繋ぎ、そんな話を交えながら中野家を後にするのだった。

バレンタイン

２月１４日。
世間ではバレンタインで盛り上がっている。
僕達三年生は自主登校となっているのだが、五月と風太郎は試験本番まで登校して勉強をするそうなので、他の姉妹や僕も二人と同様に登校することにしている。
「はい、カズ君！愛情たっぷり込めて作ったんだから」
「うん！今年は去年よりうまく作れた…」
「私もです！今年は一人で作ったんですよ！」
「あの…市販品で申し訳ないのですが、受け取っていただけると嬉しいです」
「皆ありがとね。家に帰ってから食べるよ。五月は受験が控えてるんだから、その気持ちだけでも嬉しいよ」
受け取ったチョコは鞄の中にしまった。
「上杉は相変わらず先に行っちゃってるのね、彼女を置いて」
「あはは……そ、そういえば、直江さんは今年も紙袋持ってきてるんですか？」
「まあね。念のため」
「紙袋？あー……なるほどね」
紙袋など何に使うのか疑問に思った二乃であったが、すぐに理解をしてくれたようだ。
「去年の量は凄かったですからね」
「教室の机の上にも大量にあった」
「皆！まずは靴箱から凄いんだから！見たらビックリするよ」
興奮したように四葉が言ってくる。そんなところに桜が近づいてきた。
「皆さん、おはようございます」
「おはようございます桜」
「なーに？朝からご機嫌ね」
「えへへ、バレンタインに自分が参加することになるとは思ってもい

なかったので。はい、和義さん。チョコレート作りは初めてだったのですがうまく作れたと思います。受け取っていただけると嬉しいです」
「へぇ～初めてなんだ。ありがとう」
　差し出されたチョコを受け取ると桜は嬉しそうにしている。
「それにしても周りの視線凄いね」
「あ、三玖もそう思う？去年もそうだったから」
「僕一人だったらとんでもない事になってただろうね」
　一花と付き合っている事は公に出来ないから、周りからすれば僕には彼女がいない事になってるからなぁ。
　そんな風に考えているともじもじと鞄の中を見たりしている四葉の姿が目に留まった。
　仕方ない。
　自分の携帯である人物の連絡先を出すと電話を掛ける。
「あ、風太郎？」
「え？」
「今学校に着いたんだけどさ、ちょっと屋上の手前にある自販機まで来てくんない？……　いいじゃんちょっとだけだからさ……　ありがとね。じゃまた」
　電話が終わったので携帯をしまう。
「あ、あのぉ…　直江さん…　？」
「屋上の手前にある自販機。そこに今から風太郎が来るから、その鞄の中身渡してきな」
「…　っ！ありがとうございます！」
　勢いよく頭を下げると凄い速さで走って行ってしまった。
　世話の焼ける二人だ。
「さっすがカズ君」
「ホントに。気が利いててそこに惹かれる」
「ですね」
　残った姉妹の三人がニコニコと反応している。
「一花さんがここにいたら、また嫉妬されますよ？」

「そんなつもりはないんだけどね」
桜のそんな言葉にやれやれと頭を掻きながら自分も教室に向かうのだった。

「やっぱり四葉には甘いよね？」
今日は仕事を早く終わらせたと言ってうちに来ている一花。
朝の出来事を報告するとジト目で見ながらそう伝えてきた。
「そうかな？普通だと思うけど…」
「まあ、兄さんは四葉にというよりも娘達全員に甘いんですけどね。それはそうと今年も多くのチョコを貰ってきましたね」
ソファーの上に置かれているチョコの入った紙袋を見ながら感想を伝えてくる零奈。
今年は風太郎が受験直後ってこともあるから毎年お願いしてることも出来なかったしなぁ。どうしたものか。
「あれとは別に娘達と桜さんのがありますよね？」
「ああ、別に取ってあるよ」
「へぇ～。じゃあ私のはもういらないか。どうせお母さんからも貰ってるんでしょ？」
「もちろんです」
包装されている箱を手にそんなことを言ってくる一花。
「いやいや、一花のは特別っていうか。恋人になって初めてのバレンタインだし、欲しいなって…」
「そ、そっか…えへへ…じゃあ、はい。今年もチョコ以外にしてみたんだぁ」
「開けてもいい？」
「う、うん……」
手渡された箱は細長く小物的なものが入っていそうだ。
「へー、これネックレスだよね」
「うん、そう。一応ペアネックレスだよ」
一花は自分の首に下げていたネックレスを見せながらそう言ってきた。

「良いじゃん。これだったらお互いの仕事の邪魔にならないだろうし、いつでも身に付けられるよ」
「うん！これで寂しくないかなって…」
「ありがとう。大事にするよ」
　そこで一花と見つめ合っていると。
「コホン。私がいることを忘れてないですか？」
「おっと」
「ご、ごめんねお母さん。あ、そうだ。今日泊めてくれないかな？」
「まったくいつも急なんですよ」
　急なお泊りに対して零奈は呆れ気味である。
「僕は別に構わないけど。僕も零奈も明日も学校だから朝早いよ？」
「大丈夫大丈夫。私も朝から仕事で出かけるから、同じくらいに出ると思うよ」
「他の姉妹には？」
「今日は外泊だって言ってある」
　メッセージを送ってある携帯画面を見せながらそう言ってくる一花。
　最初から泊まる気満々である。
「こういう時は計画的なのですから…　夕飯も終わってますので、先にお風呂いただきますね」
「ああ。一花は零奈の次でいいよ」
「あー…　私は台本の確認とかしときたいからカズヨシ君の後でいいや」
「そう？」
　という事で、急遽一花のお泊りが決定するのだった。

「ふぅー、いいお湯だ」
　零奈が上がった後にお風呂に入る。今日も一日呼び出しやらなんやらで忙しかったから疲れたもんなぁ。
　そんな風にお風呂に浸かっていると。
『カズヨシ君、入ってる？』

一花がドアの向こうから声をかけてきた。
「ああ。もう少しで上がるからまた声かけるよ」
『その必要ないよ。私も今から一緒に入っていいかな？』
「え？」
ガチャ
僕の許可など関係なくドアを開けて一糸まとわぬ姿の一花が入ってきた。
「やっほー」
「なんで!?」
「えへへ、一緒に入りたかったからさっきはああ言ったんだ。ここのお風呂たしか広かったから一緒に入れると思って」
本当にこういう時の計画性はいいよね。
そんなこんなで、一花は自身の体を洗い僕の前に体を入れる形で湯船に入ってきた。
「はぁー… 気持ちいいね」
「そ、そうだね」
「あれー？もしかして緊張してる？」
「当たり前でしょ。一緒にお風呂に入るのなんて初めてなんだし」
「あはは… まあ、私もちょっと緊張はしてるんだけどね。ふぅ…… 本当に気持ちいいな。やっぱりカズヨシ君と一緒だからかなぁ」
僕へともたれ掛かりながら、もぞもぞとお尻を動かし始める。
「ちょっ、動かないで」
「え？どうし……」
そこまで言って、一花は驚いたように言葉を飲み込んだ。
「あれ、これ……」
一花が恐る恐る視線をお湯の中に落としていく。
「……」
気まずい。
いや、何度かえっちはしてるし、そういう意味では隠すようなことじゃないけど。

「ほ、ほら……　僕だって男なんだし、二人で肌が触れ合っていればね…」
「そ、そうなんだ……　あはは……」
　だんだんと言葉が勢いを失っていく。
「……　僕、出ようか？」
「だ、だめっ！カズヨシ君と一緒がいいの！」
「……　はい」
　一花の勢いに押され、僕は引き下がった。
「……」
　まあ、しばらくすれば収まる……　よね？
　僕達はお互いに気にしないようにしながら、湯船に体を沈める。
「んー」
　一花は両手を組むと、軽く伸びをする。
「……　お風呂、気持ちいいね」
「やっぱ、二人一緒だと狭くない？」
　そのせいで、股間のアレがソレな感じになって、一花にバレたんだけど。
「もう、なに言ってるの。二人で入ることに意味があるんだよ」
「……　まあ、一花が気にしないなら別にいいんだけど」
「うん、気にしてないから。だいじょーぶ」
　そう言うと、一花は脱力して、完全に僕に体を預けてくる。
「ふあぁ……」
　一花は気持ちよさそうに目をつぶり、小さく息を吐く。
　すごくリラックスしているというか、安心しているというか……
「こうしてると、なんだか落ち着くね……」
　……　僕は落ち着かないんだけどね。
「こやって落ち着けるのはね、大好きなカズヨシ君と一緒にいるからだよやっぱり」
「一花……」
　一花の気持ちが嬉しくて、愛おしくて、気付けば一花を抱きしめる。
「ん……」

「僕も一花のこと好きだよ」
「えへへ……　ありがと」
　一花は僕の腕にそっと手を重ねてくる。
「今……　私、幸せだよ。カズヨシ君と、こうして……　あ、あれ……　また……　うそ……」
　一花が無言でお尻を左右に動かす。
「う、あ……　ちょ、ちょっと一花動かないで」
　擦れて気持ちよくなってしまう。
「あ、あのさ……　さっきからずっと大きいまま、だよね？」
「……　そうだね」
「その……　カズヨシ君、もしかして……　したくなっちゃった？」
　顔を赤くしながら、一花が聞いてくる。
「……　一花のこと可愛いなーと思ってたら、その……　小さくならなくて」
　一花と二人で風呂に入って、その上……　肌が触れ合っているんだ。
　落ち着かせる、という方が無理だ。
「そ、そうなんだ……　ふーん……」
　ちょっと考えた後、一花はいたずらっぽく微笑う。
「ね、カズヨシ君。じゃあ、こういうことしたら、気持ちいい？」
　僕のモノがお尻の割れ目で擦れるように、軽く腰を揺すり出した。
「う……　い、一花……　？」
「あ……　すごい……　また、すごく硬くなってる……」
　お湯の中だからか、動きはゆっくりだ。
　けれども、一花が自分から腰を動かし、僕のモノを擦っている。
　そう考えると、鼓動が早まり、よりしっそう興奮してしまう。
「ん、ん、ふ……　は……　お尻だと、むずかしいね……。こっちのほうが、いいかな……　？」
　独り言のように呟くと、一花は股の間にペニスを挟み込んだ。
「ふふ……　変な感じ。私におちんちんが生えたみたい」
　自分の股間から顔を出している僕のモノを、指で軽く撫でまわす。

「う、あ……」
「カズヨシ君……　気持ちよさそう……」
うっとりした顔をして、一花はさらに僕を責めてくる。
太ももの間で竿を挟み込み。カリを指でくすぐる。
腰を上下させると、秘裂を押しつけながら、僕のモノを擦る。
「ん、んっ……　は、ん……　カズヨシ君……　私、なんだか……
えっちな気分になってきちゃった……」
頬を染め、目を潤ませ、一花が僕の方に振り返る。
「……　僕も、同じかも」
今は一花がほしくてしかたない。
「……　ん、いいよ。カズヨシ君……　えっち、しよ」
そう言うと、一花は軽く腰を上げると、割れ目に先端を押しつけてくる。
「でも、零奈にバレるかも」
「おちんちんを、こんなに硬くしてるのに？」
「それは……　まあ、そうだね」
「いいんじゃないかな。お互いにそうしたいんだし。それに……
お風呂でって、どんな感じか、ちょっと興味あるし」
くすくすと笑いながら、一花が腰を動かして位置を調整する。
「……　ん、う……　お湯の中だから……　ちょっと、入れにくいかも……」
そう言いながら、一花は自分から秘所を左右に開き。膣口に亀頭をあてがうと、ゆっくり腰を下ろしてくる。
「あ、ん……　カズヨシ君の……　入ってくる……　んんっ」
先端が中に入ると、感じていた水の抵抗がなくなる。
そのまま腰を軽く突き上げると、僕のモノは一花の体の奥へと入っていく。
「あ、んん……　は、ん……　カズヨシ君の……　入ってる……
あ、あっ、ん、あ……　ふ……」
艶を含んだ吐息と共に一花が呟く。
「う、あ……　一花の中、すごく熱い……」

一花の中は、お湯の中でもはっきり分かるくらいに濡れ、熱くなっていた。
「ん、あ、ふ……。だって、カズヨシ君とえっちしてるんだもん……当たり前だよ。カズヨシ君だって……おちんちん、また……おっきくなってるみたいだよ？」
「そりゃ……一花にここまでされて、我慢できるわけないでしょ」
「えへ。我慢できないくらい、私ってば魅力的なんだ？」
からかうように聞いてくる。
「そうじゃなきゃ、こんなふうにならないよ。一花は魅力的な女の子だよ」
「あ……」
一花の顔が一気に真っ赤になる。
「カ、カズヨシ君ってば、たまに……そういう恥ずかしいこと、真顔で言うよね」
「照れるくらいなら、そんなこと聞かなければいいのに」
「うう……い、いいの。恥ずかしいけど……嬉しいし」
「まったく、恥ずかしいことといってるのはどっちなんだか」
僕は、細く白い肩やうなじに何度もキスを繰り返す。
「んっ、あ……くすぐったいよ、カズヨシ君……あ、ん……」
「じゃあ、こっちも一緒に……」
繋がった状態で、腰を上下させる。
最初は小さく揺らいでいただけの水面が、すぐに大きな波で乱れうねる。
「んっ、んっ、あ、ふ……んんっ、あ、ああ……！」
「……ちょっと動き難いな」
水の中は思ったよりも抵抗がある。
「はあ、はあ……それじゃ、わたしも……いっしょに……する、から……」
そう言うと一花が自分から腰を揺すりだす。
水面がさらに波立ち、ちゃぷちゃぷと音を奏でる。
「んっ、あっ、んんっ、カズヨシ君……あ、あふっ、いいよ……

気持ちいい……　いいの……」
「うん……　僕も、気持ちいい……　！」
「ん、あっ、もっと、もっと、もっと擦ってぇ……」
「わかった」
　一花に求められるまま、僕はさらに腰の動きを早める。
　突き上げ、擦り、円を描くように動かす。
　膣襞をカリがひっかくたびに生まれる熱い刺激が、そのまま快感へとかわっていく。
「あっ、あっ、ああっ、お腹の中……　熱いの……　んんっ。はあ、はあ……　あ!?んんっ！や、そんな……　カズヨシ君、ちょっとま……　あ、ああ……　んっああ！」
　一花が大きく喘ぐ。
　自分から体をくねらせ、息を乱している。
……　あれ、もしかして……
　一花の腰に手を当て、体を固定し、こつこつと体の奥を何度も叩くように深く突き上げる。
「あっ、あっ、だめ、そんな……されたら……　私、もう……　もう……　あ、ああっ、んっ、あああっ！」
　頭を左右に振り、甘い声をひっきり無しにあげる。
「んあっ！や、いっ、いくっ……　！ふぁああああっ!!」
　びくびくっと、体を震わせると、くたりと脱力する。
「はあっ、はあっ、はっ、はあ、はあ、あ、ん……」
　細い肩を上下させ、荒い呼吸をくり返す。
　もしかして……
「あ、ま、まって……　私、イッたから……　少し、待って……」
「イッたんだ？」
「はあ、はあ、ん……　うん、だから……」
「……」
　湯船の中、再び腰を動かし始める。
「ふやっ!?や、あ、んっ、カズヨシ君、イッた……　イッたの、だから……　んっ、んっ。だめ……　動いちゃ、だめ……　あ、あっ、

待って……　んんっ、んああっ!!カズヨシ君、いじわる……　だよぉ……　あ、ああっ、だめ……　なのにぃ……」
「じゃあ……　やめる？」
一花の体を抱きしめ、耳たぶを甘く噛む。
「……　ずるいよ……　カズヨシ君。わかってるくせに……」
切なげな吐息をこぼし、一花は自分から腰をゆっくり動かし始めた。
「あ、ん……　ふ……　あ、あ……　んくっ、んあ……　！　い……　いいっ、カズヨシ君……　気持ちい……　また、私……　いいの……　あ、ああ……　！」
絶頂の余韻もあったのか、一花はたちまち快感に蕩けていく。
「はあ、はあっ、んっ、あ……　カズヨシ君、どうしよ……　気持ちいいの……　とまらない……　あ、ああっ」
「もっと感じてるとこを……　一花のえっちな声、聴かせてほしい」
言いながら、胸に手を這わせると、おっぱいを優しく撫でまわし、軽くこねまわす。
「あ……　んんっ。あ、や、カズヨシ君……そんなにしたら、動けない……　あ、あふっ」
柔らかな感触を楽しみながら、一花の胸を愛撫し続ける。
「おっぱい、ばっかりぃ……　カズヨシ君、も……　そんなにされたら……　ん、あ……　だめ……だってばぁ……　あ、ああっ」
抗議にかまわずぷっくり膨らんでいる乳首をきゅっとつまむ。
「ふああっ!?」
また、軽くイッたのかもしれない。
焦点が甘くなった目が空を泳ぐ。
快感に蕩けた表情を浮かべる一花の口の端から、つうっと涎がこぼれる。
「このまま、続けるね？」
「あ……　ん、あ……　カズヨシくぅん……　また、わたし……　今……　んっ、あ、ふ……」
体に力が入らないのか、軽く腰をよじるだけだ。

僕は、さらに一花を感じさせるために、乳首を刺激しながら、腰を前後に動かす。
「んあああっ！あ、ああっ、だめ、カズヨシ君……　こんな、何度も……　あ、私、おかひくなる……　んんっ。ふぁああっ！あーっ、あ、ああ……　い、いっちゃう……　あ、また……　カズヨシ君……　また……　私、私……　！」
胸を揉みながら、耳たぶを甘く噛む。
そうしながら、奥のほうを何度も突き上げ、時々膣襞を擦るように一気にモノを引き抜く。
「ひうっ!?んっ、んっあ、あふっ、あ、んっ、きもちい……　いいよ……　カズヨシくぅん……　あ、ああぁ……　！あ、ああっ、だめ……　また、いく……　いっちゃう……　あ、あっ、ああっ」
「いいよ。イッて」
胸を揉む手の動きにも変化をつけ、前後の動きをより激しくする。
「あ、や……　カズヨシ君、これ以上されたら、私……」
「されたら？」
きゅっ、きゅっと、リズムを付けて、左右の乳首を同時に刺激する。
「ふぁああっ！あ、あっ、も、や……　やらぁ……　また、いく……　いっちゃ……　わらし……　わたし、んっ、んんっ」
「いいよ……　一花、イッていいから」
ごりごりとカリが膣襞を擦るたび、一花が腰を震わせ、体をくねらせる。
深くつながり、先端で子宮口を突き上げ、ぐりぐりと擦る。
「んくうっ！あ、ああ……　や、おちんちん、そんなに、こすったら……　らめっ、だ、めぇ……　あ、ああ……　！はあ、はあ……　わたし、らけ……　や、なのぉ……　一緒……　カズヨシ君もいっしょ……　いっしょがいい……」
「一花……」
「だから……　カズヨシ君……　おねがい……　あ、ああ……　いっしょ、私と……　んんっ」
「……　わかった。一緒にイこう」

一花の中をさらに激しくかき混ぜる。
湯船が大きく波立ち、ちゃぷちゃぷと音を奏でる。
「う、く……」
収縮する膣内の感触に、ぞくぞくした刺激が走る。
僕も……イキそうだ。
「一花……僕も、そろそろ……」
「ん、あ……あ、ああ……い、いく……いく……カズヨシ君……！」
がくがくと全身が震える。
一花がのけぞり、足を伸ばす。
そろそろ……だな。
「く……あ、一花……僕も、もう……あと少し、我慢して……！」
僕自身、快感の限界がすぐそこまで来ている。
ぎゅうぎゅうに締め付けてくる膣内を、激しく行き来させる。
「んあああっ！はああ……ああ、あ……がまん……も、できな……いく、いく……気持ちい……カズヨシ君……カズヨシ君……あ、もう、もう……むりぃ……私、私……！」
僕も、もう……！
「一花、このまま……全部、中に……！」
「いいよっ、出して……カズヨシ君の、全部……わたしの中に……いっぱいに、出してぇ！」
「う、あ……一花、一花……！」
水面が激しく揺れ動く。
じゃばじゃばと音を立て、僕達はただ絶頂へと向かって駆け上っていく。
「あっ、あっ、あ、あっ、い、いいっ、気持ちいっ、カズヨシ君、わた、私も、いく、いっちゃ……あ、あああっ！」
一花の全身に震えが走る。
「く……う、あ……！」
一花の体をぎゅっと抱きしめる。

そのまま、一番深い場所を、こつんっと突き上げた。
「んううっ!?」
一花は体がこわばり、顎をのけぞらす。そして……
「ふあああああああああああああああっ!!」
大きな声を上げ、一花が絶頂する。
膣が収縮し、ペニスを痛いほど締め付けられて、僕もまた、限界に達した。
「う、くううっ!」
一花の体内を、白濁が満たしていく。
「あ、あっ、あっ、出てる……カズヨシ君の、おちんちん、びくびくって……あ、ああ……ふ……はあ、はあっ、はあ……あ、ああ……カズヨシくぅん……」
ずるずると湯船に沈んでいく一花の体を慌てて支える。
「……大丈夫?」
「ん……へーき……らよ……だいじょうぶ……らからぁ……」
快感の余韻に浸っているのか、ろれつが回っていない。
「……いつまでも浸かっていると、のぼせるかもしれないね。出ようか」
「ん……って、あれ……?おかしいな……体に……力がはいらない……」
立ち上がろうとしていた一花がバランスを崩し、僕に寄りかかるように体を預けると、そのまま倒れそうになる。
「と……い、一花っ!?」
「ごめ……カズヨシ君……足、かくかくして……立てない、みたい……」
その後、ぐったりした一花を抱きかかえて、湯船から出ることになった。
「はうぅぅ……カズヨシ君、激しすぎるよぉ……」
「い、一花だって、そうでしょ……」
湯船に浸かったまま頑張ったせいか、少しのぼせてしまったかもし

れない。
　僕も一花も、グッタリしたまま荒い息をつく。
「お風呂入ったのに、また汗かいちゃった……」
「そうだね……　また体を洗わないと」
「……　どうせだし、洗いっこしよっか？」
　頬を上気させながら、上目遣いで見つめてくる。
「まあ、どうせ一緒にシャワーするわけだしね」
「うん♪」
……
　再び体を洗い終わった後、客間に布団の用意をしていたのだが結局一花は僕のベッドで寝ている。
　なんか用意するのが意味ないように思えてきたなぁ。
　とはいえ、零奈には今のところバレてはいないようではあるので客間の用意は今後もしなきゃだよね。
「どうかした？」
　何か考え事をしていると思ったのか隣の一花が聞いてきた。
　そんな一花の姿は、パンツ一枚にワイシャツといつもの軽装備である。『どうせ朝には脱いでるからいいよ』、が一花談である。
「いや、一花が泊まる度に僕のところで寝てたら客間の布団意味ないなと」
「カズヨシ君は私と一緒に寝るのは嫌？」
「そうじゃないよ。ふと思っただけだから。それに零奈もいるわけだから建前上用意はしとかないと」
　一花の頭を撫でてあげながらそう伝えると、笑顔で僕の腕にしがみついてきた。
「こうやってカズヨシ君と一緒に寝た次の日は調子がいいんだ。だから、たまに一緒に寝るのは必要なことなんだよ」
「そっか…」
　チュッ
　一花の額にキスをして眠りにつく。
　おやすみ一花。また明日から頑張ろうね。

「二人とも行くよー」
「はーい」
　次の日の朝。玄関で二人が来るのを待っている。
「それにしても、うちに泊まった時はやけにスッキリしてますね一花」
「そ…そうかなぁ。カズヨシ君の夕飯に朝食が食べれるからなのかも」
「そうですか。まあ良いでしょう」
　そう言いながら零奈が先頭に立って通学路を進む。
　そんな零奈を見てお互いに苦笑いの顔を見合せ手を繋ぐ。
　ほんの少しの間ではあるが、幸せを感じる時間でもあった。